

生物学的モニタリング：ばく露の裏付け

環境・健康

有害物質取り扱い職場では作業環境管理等が進み、災害的なばく露を除き許容濃度を大きく上回るようなばく露はまれとなっています。許容濃度レベルでの有機溶剤の主要な生体影響は、許容濃度の提案理由から中枢又は末梢神経障害、肝機能障害などが考えられます。

有機溶剤の神経系への影響で生じる症状は一般的なものであり（下記表）、被検者の症状が有機溶剤の影響によるものかどうかを判断するには、生物学的モニタリングなどによりばく露量を把握する必要があります。これは肝機能障害などについても同様です。

作用部位と症状

作用部位		症 状	
粘膜	眼	流涙、充血、眼痛	(刺激)
	鼻	鼻汁過多	
	のど	せき 等	
循 環		麻酔作用 (失神)	
神経	中枢神経	頭痛、めまい、視力低下 精神神経症状 (不安、短気、不眠、無気力)	
	自律神経	立ちくらみ、発汗、冷え性、便秘、悪心、心窩部痛 食欲不振	
	末梢神経	四肢のしびれ、痛み、萎縮、筋力低下	

kes サポート

課 題	k e s サポート
体内ばく露量の把握	生物学的ばく露モニタリング (生体試料中有害物質・代謝物等の測定)
体外ばく露量の把握	個人ばく露モニタリング (時間加重平均濃度の測定、経時的濃度の測定)
体外ばく露の情報	作業環境測定 (作業環境の管理区分)